

氏名	唐井 隆徳
研究テーマ	uvahi と uvāhi について
研究概要	ジャイナ古層経典である『アーヤーランガ』第一編を読み、そこに説かれる思想とその中に位置づけられる uvahi と uvāhi の用法を確認する。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>uvahi, uvāhi の用例を調査した結果、古層のジャイナ教聖典には、uvahi, uvāhi が業のあり方を表していると考えられる用例が見られる。しかし、その類の用例はそれ程見られず、身のまわりのものを表す uvahi の用例が多くを占めていた。そこで、本研究では業を表す uvahi が定着しなかった理由として、uvahi という用語が upa-√dha (近くに置く) の派生語であることに着目し、「近くに置く」という表現がジャイナ教の業のあり方を表す語として適さず、むしろ、身のまわりにある外面的な所有物にこそ適した表現であった可能性を指摘した。加えて、業が uvahi の範疇外にある資料を提示することで、身のまわりにある所有物を表す uvahi の用法が一般的であることも指摘した。さらに、以上の二つの視点から初期仏典を眺め、ジャイナ教と共通する用法があることと、仏教特有の用法があることを確認した。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>①上記の内容を2018年12月に佛教大学で開催された佛教大学仏教学会にて発表し、いくつかの質問を受けた。</p> <p>②論文:「ジャイナ教聖典における uvahi」、『佛教大学仏教学会紀要』24号、佛教大学仏教学会、2019年3月。</p>
3. 今後の課題	<p>ジャイナ教聖典における uvahi の用例調査をふまえて、改めて初期仏典における難語 upadhi を明らかにしていかなければならない。私は upadhi の研究に従事しており、upadhi が upa-√dhā (近くに置く) から派生した語であることから「所有物」と「所有」に訳し分ける必要があることを既に指摘した。しかし、その訳し分けが難解であるということや、訳者によってそれとは全く異なる意味が upadhi に対して与えられていることを考慮に入れば、より一層考察を加えていく必要がある。特に、upadhi に関して問題となるのは縁起説における用例である。三支縁起説は upadhi を支分とした縁起説であるが、それ以外の各支縁起説では upadhi を支分とすることはない。また、縁起説に限らず、upadhi が体系化された教義の中で用いられることは非常に少ない。そのため、なぜ upadhi が他の各支縁起説の支分として用いられないのか、また縁起説の成立史上、三支縁起説はどこに位置づけられるべきなのかを考察しなければならない。</p>